しょううつしあさがおばなし

生写朝顔話

〔解　説〕天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ道いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕宮城阿曽次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曽次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曽次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曽次郎を探す旅に出ます。

〈宿屋の段〉駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのでした。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曽次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

宿屋の段

呼び立つる。

むざんなるかな秋月の娘深雪は身に積もる、歎きの数の重なりて塒(ねぐら)失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし浅香はもろく朝露と消え残りたる身一つを、さすがに捨ても縁先の、飛石探る足元も、危き木曽の丸木橋、渡り苦しき風情にて、やう〳〵座して手をつかへ

「召しましたはこのお座敷でござりますか。拙(つたな)い調べもお笑ひ草。おはもじ様や」

と会釈する顔も深雪のなれの果て、『不便の者や』とせぐり来る、涙呑み込みひかゑゐる。岩代はそれとも知らず

「ヤア、見苦しいそのざまで、われ〳〵が目どほりへうせたは、アヽアヽ、聞き及んだ朝顔めな。エヽ、きり〳〵立ってうせをらう」

「ア、イヤ〳〵岩代氏。さう没義道(もぎどう)に仰せられな。この方に呼寄せたればこそ、思ひがけなうアヽイヤ思ひがけなう来たものを、叱るは武士の情けにあらず。コリャ女。大儀ながら、その朝顔とやらの歌、サヽ早く唄うて聞かせい」

と望む心は千万無量。知らぬ岩代面(つら)ふくらし、

「サテ〳〵駒沢氏には、イヤモきつい御執心。コリャ〳〵盲目。なんなりとも、唄へ〳〵」

「ササ早く〳〵」

「ハイ〳〵。唄ひまするでござります」

と焦がるゝ夫の在るぞとも、知らぬ盲の探り手に、恋ゆゑ心つくし琴、誰かは憂きを斗為吟(といきん)の、糸より細き指先に、さす爪さへも八ツ橋のやつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪しらべ、

〜露のひぬ間の朝顔を、照らす日かげのつれなきに、哀れ一むら雨のはらはらと降れかし

「ムヽ、夫を慕ふ音律の、われ〳〵が身にも思ひやられて、思はずも感涙いたした。ノウ岩代殿」

「いか様。琴といひ器量といひ、イヤモなか〳〵感心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲。サヽ所望だ〳〵」

「アヽイヤ、岩代殿、もう赦しておやりなされい」

「さりとては駒沢氏、身どもが望むを止めさっしゃるは、そりゃ意地の悪いと申すもの」

「イヤ、さうではござらねど、かれも定めて疲れませうと存じて」

「ハヽア、しからば曲は止めにして、コリャ〳〵女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた一興。話して聞かせ、サヽどうだ〳〵」

「ハイ〳〵よう問うて下さります。お詞にあまへお話し申すも恥ずかしながら、もと私は中国生れ、様子あって都の住居。一年宇治の蛍狩りに焦がれ初めたる恋人と、語らふ問さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、ところ尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ国の迎ひ。親々にいざなはれ難波の浦を船出して、身をつくしたる憂き思ひ、泣いて明石の風待に、たま〳〵逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、国へ帰れば父母の、思ひも寄らぬ夫定め。立つる操を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしのぎ都路へ、登って聞けばその人は、東の旅と聞く悲しさ。またも都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の関路をあとに近江路や、身のをはりさへ定めなく、恋し〳〵に目を泣潰し、物のあいろも水鳥の、陸にさまよふ悲しさは、いつの世いかなる報ひにて、重ね〳〵の

歎きの数、憐れみ給へ」
とばかりにて、声を忍びて歎きける。
「テサテ哀れな話。しかし男日照りもない世界に、エヽ気のせまい女だな。イヤモしゅんだ話で気がめいった。寝酒でもたべ気を晴らさう。イヤナニ女。暇(いとま)をくれる、立帰れ」
「ハイ〳〵、ありがとうございます。さやうなればお客様。もうお暇申します」
「ヲヽ朝顔とやら、大儀であった。初めて聞いた身の上話。もしその夫が聞くならば、さぞ満足に思ふであらう。ノウ岩代殿」
「左様々々」
「ハヽア、これはまあ御親切なお詞、ありがたう存じます」
と、杖探り取り立ちながら、虫が知らすかなんとやら、耳に残りし情の詞、名残惜しさに泣く〳〵も、心はあとに探り行く。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。
予めご了承ください。